慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ語の「不在構文」について
Sub Title	Zum Absentiv im Deutschen
Author	中山, 豊(Nakayama, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.151- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツ語の「不在構文」について[1)]

中　山　　豊

雲只言松　　尋
深在師下　　隠
不此採問　　者
知山薬童　賈　不
処中去子　島　遇

Ⅰ.

最近の文法研究で注目を集めている文法事象の1つに，de Groot（2000）の命名による不在構文（Absentiv）がある。これはX ist einkaufenのように〈sein+不定詞〉という形式をもち，以下のような特徴をもっている（Vogel 2009: 7f.）：

（ⅰ）　形態統語的特徴：

a. 動詞seinに行為動詞（Handlungsverb）が加わったもので，主語はseinと文法的に一致する。

b. 語彙的に不在を示すweg, (weg)gegangenのような要素があってはならない。

（ⅱ）　意味的特徴：

a. 主語で表される人物Xがダイクシスの中心（=DZ）であるとみなされる拠点を離れていて，視野の範囲にもいない。

b. 人物Xが拠点を離れているのは別の場所で行為動詞によって示

される行為を遂行するからである。

c. 原則的には人物Xはその行為の遂行にふさわしい時間が経過した後に戻る，と考えられる。

d. 人物Xはその行為を趣味などのように定期的に行う。

これらの諸特徴を全て満たすものが「不在構文」であり，以下の実例がその典型的使用例である[2)]：

（1） a. カイテルにつなげ。なに？　めしをくいに出た？　ではホイジンガーだ。そこらにおるだろう。

b. Generalfeldmarschall Keitel! Was? Er ist Mittag essen? Dann Heusinger, er muss [sic] da sein.

上掲の基準に照らし合わせると（1b）下線部の Er ist Mittag essen は特徴をすべて満たしている典型的不在構文ということになる。すなわち，

（ｉ） 形態統語的特徴：

a. 動詞 sein と行為動詞の不定詞句 Mittag essen とで構成され，sein は主語と一致して ist となっている。

b. 語彙的に不在を示す weg, (weg)gegangen のような要素は存在しない。

（ii） 意味的特徴：

a. 主語の指示対象であるカイテル将軍は DZ である会話の場にはおらず，電話をかけたヒトラーからも電話をとった部下の視野の範囲にもいない。

b. カイテルは DZ とは異なる場で昼食をとるために不在だ。[3)]

c. カイテルは昼食が終われば本部に戻り職務につくと考えられる。

d. カイテルは定期的に昼食をとる。

主語の指示対象の不在を表している表現でも，それが文法形式ではなく語彙的手段によるものであれば（ib）の制約により不在構文とはみなされないことになる：

（2） Kann ich mit Hans sprechen?

a. Tut mir leid, er ist einkaufen.

b. Tut mir leid, er ist einkaufen gegangen.

c. Tut mir leid, er ist zum Einkaufen weggegangen.

d. Tut mir leid, er ist bereits unterwegs.

上の電話での問い（2）に対する応答（2a)-(2d）の中で，（2a）のみが語彙的手段に頼らずに不在を表す構文であるが，（2b)-(2d）は (weg)gehen, unterwegs などの語によって不在を表現しており，不在構文ではない。

（2a）と（2b）は意味だけでなく形式的にもよく似ているので，Blatz（1896/1970: 569f.），Wilmanns（1906/67: 176f.），Dal（1966: 102） などの史的文法家には（2a）を（2b）の移動動詞の省略により派生したものと考えるものが多い。この説に対して Vogel（2007: 257f.）は両者の関係を移動動詞の (weg)gehen と状態動詞の sein との交替により説明する説を提示している。前者は Krause（2002: 86）が言うように開始相を表し，後者はその結果生じた状態相を表すというものである。しかし Vogel はこの説を具体的言語事実に基づいて十分に論証しているとは言えず，示唆するにとどまっている。

本論は不在構文を移動動詞の省略により説明する説が妥当性を欠くことを明らかにし，Vogel の説を具体的言語事実により補強し，さらにこれまで注目されなかった〈kommen+ 不定詞〉構文と不在構文との関連をも示し，上掲のこの構文の特質をより精緻なものに修正する試みである。それによってこの構文がドイツ語動詞相の体系という大きな枠組みの中で占めている位置も適切に把握することが可能になるであろう。

Ⅱ.

〈sein+ 不定詞〉の形をとる不在構文を，移動動詞の省略によって説明する説には，他の文法事象と照らし合わせると，根拠がないわけではない。例えば（3）の文で方向規定句を含む場合の移動動詞省略はアドホックな操作ではなく，ドイツ文法では広く見られる現象の 1 つである：

（3） Sie ist in den Supermarkt einkaufen (gegangen).

（4） a. Sie muß / will zum Superparkt (gehen).

b. Er ist über Land / aufs Feld / nach Amerika (gegangen/ gefahren). (Willmans 1906/1967: 176f.)

（3）のような方向規定句を伴う文では省略説でも説明がつくが，場所の規定句がある場合には移動動詞構文は（5b）は容認不能となり，これが不在構文の基盤になるとは考え難い：

（5） a. Sie ist im Freibad schwimmen.[4)]

b. *Sie ist im Freibad schwimmen gegangen.

（6） a. Mit ihrem Trainer, dessen Bruder Markus und dessen Freundin war sie in der Players Lounge essen,... (Krause 2002: 154)

b. *Mit ihrem Trainer ... war sie in der Players Lounge essen gegangen.

不在構文と移動動詞の完了文との関係を考察するうえで参考になるのが，状態受動と動作受動の完了文との関係である。この 2 組の構文関係の類似性を Thieroff（2007: 172f.）が提示した 3 つのテストを用いて明らかにしてみよう。

第 1 のテストは過去の時を表す規定句との共起の可能性を調べるものである。（7a）の動作受動と（8a）の移動動詞構文の完了文がいずれも問題ないのに対して，対応する状態受動文（7b）と不在構文（8b）はともに非文となる。後者が容認可能となるためには（7b’），（8b’）のように sein を過去形にするか，（7b”），（8b”）のように現在完了形にしなければならない。

（7） a. Die Ausstellung ist *gestern* eröffnet worden.
b. * Die Ausstellung ist *gestern* eröffnet.
b’. Die Ausstellung war *gestern* eröffnet.
b”. Die Ausstellung ist *gestern* eröffnet gewesen.

（8） a. Er ist *gestern* einkaufen gegangen.
b. * Er ist *gestern* einkaufen.
b’. Er war *gestern* einkaufen.
b”. Er ist *gestern* einkaufen gewesen.

第 2 のテストは期間を表す副詞句との共起が可能かどうかを問うものである。動作受動文（9a）と移動動詞構文の完了形（10a）はともに非文となるのに対して，状態受動文（9b）と不在構文（10b）はいずれも問題のない文である。このことから後者は継続相の文であることが分かる：

（9） a. * Die Ausstellung ist *immer noch* / *seit heute früh* eröffnet worden.
b. Die Ausstellung ist *immer noch* / *seit heute früh* eröffnet.

（10） a. * Er ist *immer noch* / *seit heute früh* einkaufen gegangen.
b. Er ist *immer noch* / *seit heute früh* einkaufen.

第 3 のテストは，行為の結果の継続した状態が文の本質的意味を構成

するか，単なる語用論的含意に過ぎないかを試すものである。（11a）と（12a）の現在完了文では行為の結果は後続の適切な表現よって打ち消すことが可能である。これに対して状態受動文（11b）と不在構文（12b）が表している結果としての状態は，追加の表現では取り消しできない。このことから結果状態の継続は両構文の本質的意味の一部を構成していると考えられる：

（11）a. Die Ausstellung ist eröffnet worden, *aber dann ist sie wieder geschlossen worden*.
b. *Die Ausstellung ist eröffnet, *aber dann ist sie wieder geschlossen worden*.

（12）a. Sie ist einkaufen gegangen, *aber dann ist sie wieder zurückgekommen*.
b. *Sie ist einkaufen, *aber dann ist sie wieder zurückgekommen*.

不在構文が移動動詞構文から省略によって説明できないもう 1 つの証拠として，片方の構文で使用可能な動詞が，他の構文にそのままでは使用できない，ということが挙げられる。例えば移動動詞構文（13a）では動詞 sich hinlegen を用いてもかまわないが，そこから移動動詞省略により派生されると考えられる（13b）は非文となる。（13b）が容認されるためには（13b’）の eine Stunde のような期間を示す句が必要である（de Groot2000:708）：

（13）a. Paul ist sich hinlegen gegangen.
b. *Paul ist sich hinlegen.
b’. Paul ist sich eine Stunde hinlegen.

以上の諸事実から不在構文は移動動詞構文から省略によって生じたもの

ではなく，また両者の意味は等価ではない，ということは明らである。移動動詞構文は事態の開始を表し，その完了形は完結を表す。しかしその結果が継続していることを保証するものではなく，それは不在構文によって表されるのである。

Ⅲ.

前節の終わりでどのような動詞も不在構文に用いられるわけではないことに触れた。動詞の制約に関しては Glück（2005:7）が Handlungsverb, Duden（2006:434）が intransive Tätigkeitsverben, Vogel（2009:12）が「非常に Agentivität）の高い動詞」などと表現は異なるものの行為を表す動詞である点では諸家は一致している。Krause（2002）のコーパスには 42 例の不在構文が現れ，そこに使われている 26 個の動詞と出現頻度は以下のようになっている（Vogel 2009:12, Anm. 6）：

（14） arbeiten(2), baden(1), (Mails) beackern (1), (Freund) besuchen (1), duschen (1), einkaufen/einkoofen (4), (was/wat) ess(en) (6), hottn (1), J/joggen (2), kacken (2), (Platten) kaufen (1), kegeln (1), laufen (1), (waesche) machen (1), M/mittagessen (2), (beeren) pflücken (1), pissen (1), putzen (1), (hirsch) schießen (1), schwimmen (2), shoppen (1), spazieren (1), surfen (1), tanzen (2), Telefonieren (1), T/tennisspielen (2), zelten (1).

これらの動詞は Vendler（1967）の動詞相分類に従うと以下のような分布を示す（Krause 2002:166）:

（15）

	ACT	ACC	ACH	?	∑
体系的コーパス	15	2	—	—	17
個別例	5	1	2	—	8
新聞	6	2	—	—	8
チャット	9	—	—	1	10
合計	35	5	2	1	43
%	81.4	11.6	4.7	2.3	100

ACT = Activity（行為動詞）：[+durativ,+dynamisch, -telisch,]
ACC = Accomplishment（達成動詞）[+durativ ,+dynamisch,+telisch]
ACH = Achievement（到達動詞）[-durativ,+dynamisch,+telisch]
参考：State（状態動詞）[+durativ, -dynamisch, -telisch]

表（15）から読み取れることは，第 1 に不在構文に表れる動詞は行為動詞が 81.4% と圧倒的に多いということ。第 2 に Vendler の 4 分類のうちの状態動詞が 1 例もないこと。第 3 に到達動詞が 2 例あるということである。

第 1 の行為動詞の出現頻度が高いという点は，不在構文が，主語の支持対象となる人物が拠点を離れているのは何らかの行為をするためであることを表す形式であることからして当然予想できる結果と言えよう。Vogel（2009: 12）の言うように，これらの動詞は「非常に高い動作性（Agentivität）を示している」ように思われる。ここで注意しなければならないのは，必ずしも不在構文の主語が不定詞の動作主である必要はない，ということである。例えば（16），（17）の各文の動詞は高い動作性をもつものの，その意味上の主語は不在構文の主語とは一致しない別人物である。（16）では「少女は（美容師に）髪を刈ってもらいに」，（17）. は患者で「（検査技師に）採血されに」行ったのであり不在構文の主語は不定詞句の動作主ではなく被動作主の働きをしている：

（16） Das Mädchen war Haare schneiden.

（17） Ich war Blut abnehmen.

de Groot（2000:709）はオランダ語，ノルウェー語，ドイツ語などでは統語的受動態（ドイツ語では werden 受動が相当）は不在構文には表れないと述べているが，主語が被動作主も兼ねることが可能なこの構文では受動態に変える操作はそもそも不要なのである。

第 2 の状態動詞が 1 例もないという点も，拠点を不在にする理由がある行為をするためであるという不在構文の意味特徴からの自然の帰結と言える。ここで問題なのは何をもって行為あるいは状態とみなすのか，その言語的基準である。Abraham（2008: 362f.）は不在構文には状態動詞が使用可能であると主張して，その例として schlafen を挙げている。schlafen は確かに直感的には状態を表す動詞で，（18）のように不在構文で用いることが可能である。これをもって不在構文は状態動詞を許容すると考えてよいのであろうか：

（18） Véronique ist schlafen.

Abraham に対して Rothstein（2007: 9f.）は schlafen を行為動詞とみなす。彼はライン進行形（rheinische Verlaufsform）と呼ばれる〈sein+am+不定詞〉構文が行為動詞は許容するが状態動詞は許容しないことを判断基準に据える。この基準に従えば（19a）が成立する schlafen は行為動詞である。[5] Rothstein の主張が正しければ状態動詞は不在構文を形成できないという制約には例外がなくなることになる：

（19）a. Véronique ist am Schlafen. （行為動詞）
b. *Véronique ist am in Paris sein. （状態動詞）

第 3 の点は到達動詞が 2 例あるという問題だ。到達動詞は瞬間相なの

で一定時間ある行為を遂行するという不在構文の本質的な意味とうまく整合しないことになる。現に典型的な到達動詞は（21）が示すように不在構文の成立を許さない：

（20）a. Sie ist einen Job suchen. （行為動詞）
b. Sie ist das Fahrrad reparieren.（達成動詞）
（21）a. *Sie ist einen Job finden. （到達動詞）
b. *Sie ist einschlafen. （到達動詞）

Krause（2002: 201）が到達動詞として挙げている例は（22），（23）である：

（22） mein mann und die kinder sind beeren pflücken im wald
（23） warst du platten kaufen? (jüngere Schwester zur älteren, als diese mit einer Schallplatte in der Hand nach Hause kommt)

どの例においても動詞の目的語は無冠詞の複数名詞で，これは反復相を表しているように見える。ただし Krause は（23）では実際に買ったレコードは 1 枚であるから，この例に関しては反復相ではない，と主張する。では kaufen の目的語が単数の定名詞句ではどうかというと，不在構文（24）は問題なく成立する：

（24） Sie ist die neue CD kaufen.

die neue CD kaufen が継続相の達成動詞なのか，瞬間相の到達動詞なのかは Krause（2002: 202）が行っている思考実験をしてみればよいだろう。（24）の主語である彼女が CD を買いに行く途上にあるのか，店に着いて目当ての CD を探しているところなのか，実際に代金と CD を交換して

いるところのか，を問わずにその一連の過程を「買う」行為とみなすならば継続相であり，最後の代金と商品との交換行為だけをとらえて「買う」行為みなすならば瞬間相である。一般的な解釈は前者であり，Krause もその解釈を採用している。したがって，（22）と（23）はともに到達動詞ではなく行為動詞，（24）は達成動詞ということになる。

行為動詞と達成動詞のみが不在構文に現れることになるが，両者が共有する特徴は [+dynamisch]，[+durariv] である。[6)]

Ⅳ.

前節まで主語が 3 人称の例を主に見てきた。不在構文は第 1 節の特徴リストの（iia）によれば発話場面に主語の指示対象が存在していないことを表すのであるから，主語が 1・2 人称であることは発話の当事者の不在を意味することになり不都合が生じるのである。ゆえに Abraham（2008）は主語が 1・2 人称を研究対象から除外している。しかし前出の（17）の主語は 1 人称，（23）は 2 人称であり，1・2 人称の主語は決して不可能なのではない。ただし，その場合には不在となる行為時は発話時とは一致しないことになる。まず 1 人称の場合を見てみよう：

（25）a. Bin einkaufen! (Krause 2002: 117)

b. Du, ich bin jetzt (draußen) rauchen. (Abraham 2008: 361)
‚Listen, I'll be out smoking'

c. B: Ja, ich wollt ma fragen, um ganz kurz zu machen, hättet ihr heute abend Lust und Zeit, daß wer [sic] uns mal sehen?
A: E, ja / allerdings, öh, *wir sind bis acht Uhr essen,* wir könnten also erst danach. (Krause 2002: 100)

d. Nee, ich war doch seit Jahren nicht mehr schwimmen. (ebd: 155)

主語が 1 人称の（25a)-(25c）の文ではいずれも定形が現在形の形はとっているものの，これはドイツ語には未来時を表す文法形式が欠けていることによるもので，不在になる時はいずれも発話時の後，すなわち未来時である。(25a）は「これから買い物に出かけてきます」という意味で，伝言メモとして典型的な文である。(25b）に対応する英訳文は時制が厳密なので未来形となる。(25c）では文脈上不在となる時が未来であることが明らかである。(25d）の行為時が発話時の前になっているので定形は過去形となる。未来時であるか過去時であるかを問わず，主語の指示対象である話者は発話の場面に存在している。

Vogel（2009:13）はコーパスには主語が 2 人称の例はほとんどない，と述べているが，(26）の各文はその反例である。ただしどの例でも時制は過去あるいは現在完了でいずれも疑問文の形をとっている。1 人称の場合と同様に主語は視野の範囲にいる：

(26) a. Martin, warste [sic] wieder telephonieren? (Krause 2002: 117)
b. Warst du platten kaufen? (ebd.: 201)
c. Wie oft bist du schon Blut spenden gewesen? (Ickler 2010)

では主語が 1・2 人称で現在時の解釈を許す不在構文は存在しないのか，というとそうではなく，以下のような場面が想定できる：

(27) (Im Stadtzentrum) Was führt dich hierher? – Ich bin hier einkaufen.
(28) (Übers Handy) Wo bist du? – Ich bin einkaufen.

主語が 3 人称の不在構文では通常拠点としている家や部署などと発話の場とが一致しており，主語の指示対象はいずれの場にも不在である。これ

に対して（27）では主語の指示対象は話し手で，拠点を離れてはいても会話の場にいる。（28）は携帯電話の会話で，話し手は聞き手と直接顔を合わせてはいないという違いがあるが，やはり拠点を離れた会話の場に居合わせている。

3 人称を主語とする（29b）のような不在構文は，（29a）のような移動動詞 gehen を含む現在完了文の結果が継続している状態を表していることは上で確認した。これに対して主語が 1 人称と 2 人称の場合の不在構文は，人称の直示表現を含み，これに場所の直示表現が任意に加わることによって，（30）のように移動動詞 kommen の現在完了文の残す結果が継続している状態を表すことになる：

（29）a. Julia ist einkaufen gegangen. → b. Julia ist einkaufen.
（30）a. (?)Ich bin einkaufen gekommen.[7)]
→ b. *Ich* bin (*hier*) einkaufen.

また 3 人称を主語とする標準的な不在構文においても，場所の直示表現 *hier* が入ることによって主語の指示対象が，家などの拠点を離れて会話の場にいることを表す文に変わる：

（31）a. Julia ist *hier* einkaufen.
b. Ganz Breslau scheint *hier* einkaufen zu sein. (Ickler 2010)

このように不在構文と呼ばれる〈sein+ 不定詞〉の形式では，通常の拠点を離れていることは本質的な意味の一部を構成するものの，主語の指示対象が会話の場面にいるかいないかは動詞の時制，代名詞，副詞などによって表される時・人称・場所の各ダイクシスとの総合的関係で定まる，ということが言えよう。

V．結論と展望

本論文で明らかになった事実により，冒頭の不在構文の特徴は以下のように修正する必要がある：

(32)

（ｉ） 形態統語的特徴

a. 〈動詞 sein+ 行為動詞あるいは達成動詞〉の形式をとり，主語は複合時制・（準）助動詞構文を除いて sein と文法的に一致する。

b. 語彙的に不在を示す weg，(weg)gegangen のような要素があってはならない。

（ii） 意味的特徴：

a. 不在構文は主語で表される人物 X が，通常拠点にしている場を離れていることを表現する。この拠点となる場と発話の場とが一致するか否かは，人称・時間・場所のダイクシスによって決まる。

b. 人物Ｘが拠点を離れているのは別の場所で行為動詞・達成動詞によって示される行為を行うか，あるいはその行為を受けるためである。

c. 原則的には人物Ｘはその行為の遂行にふさわしい時間が経過した後に戻る，と考えられる。

d. 人物Ｘはその行為を趣味などのように定期的に行う。

e. 不在構文はそれに対応する移動動詞構文〈gehen/kommen+ 不定詞〉の結果が表す内容の継続状態を表す。

不在構文はドイツ語の動詞相全体の中で以下のように位置づけられることになるであろう：

（33）

〈開始相〉	〈結果状態相〉
・移動動詞構文	・不在構文
Sie geht Haare schneiden	Sie ist Haare schneiden
Sie kommt Haare schneiden	Sie ist hier Haare schneiden
・動作受動	・状態受動
Ihr werden die Haare geschnitten	Ihr sind die Haare geschnitten
Sie bekommt die Haare geschnitten	Sie hat die Haare geschnitten
・機能動詞結合	・機能動詞結合
Der Haarschnitt geht aus der Mode	Der Haarschnitt ist aus der Mode
Der Haarschnitt kommt in Mode	Der Haarschnitt ist in Mode

注

1）本論文の作成にあたっては，Katrin Dohlus，Mechthild Duppel-Takayama，Hans-Joachim Knaup，Joachim Scharloth，Gabriela Schmidt の各氏にインフォーマントとしてご協力をいただいた。記して感謝したい。ただし例文の判断に不適切なところがあったとしても全て筆者の責任である。

2）例は手塚治虫（1986）:『アドルフに告ぐ』第 4 巻　文芸春秋，58 頁，とそのドイツ語訳 Osamu Tezuka (2006): „Adolf.“ Bd. 4., Hamburg, S.174 による。

3）カイテル将軍は食事を実際にとっていなくてもよく，食事の場へ行く途中であってもかまわない。これに対して，よく対比される〈sein+beim+ 不定詞〉構文では最低食事をする場所についていることが，〈sein+am+ 不定詞〉の構文では彼が実際に食事をとっている最中でありことがそれぞれ必要である。ただし am の場合には拠点を離れているという条件は不要である（Ebert2000: 632f.，König/Gast (2009: 92f.)。

4）この文は Er ist im Freibad, schwimmen と，場所規定句と不定詞の間に休止や上昇イントネーションによって区切る解釈も可能である。この場合 sein は ‘sich befinden‘ の意味をもつ存在動詞で，不在構文は場所規定句の省略により生じることになる（Krause 2002: 86, Vogel 2007:256f.）。

5）Rothstein の論が成立するためには，状態動詞がライン進行形にならないことが確かでなければならないが，ここではその問題には立ち入らない。

6） 達成動詞か行為動詞であることは不在構文を許す必要条件ではあるが十分条件ではない。例えば Sie ist Hausarbeiten schreiben という文をあるインフォーマントは「この行為の逐行が特定の場所と関連していない」ので容認するかどうか戸惑った。「宿題をするのがいつも特定の場所，例えば彼女の勉強部屋」であることを会話の当事者が了解していればより容易に容認できる文となる。

7） Ich bin einkaufen gekommen はインフォーマントの間でも容認しない人，標準語的ではないが容認できるという人，問題なく容認できるとする人がおり，判断が分かれている。Erben (1972:301, Anm.309) は〈kommen+ 不定詞〉構文は〈gehen+ 不定詞〉の範にならったものであろうが標準語としてはまだ広まっていないと評価している。しかし Dal (1966:102) には ich komme dich bitten, dies nicht zu tun (G. Freytag) や dann komme ich morgen früh revidieren (Kafka) などの例がある。Durrell (1996: 265) は kommen を gehen, や fahren などと同じ移動動詞として扱い，Kommst du heute schwimmen? をその例として挙げている。また電話で „Kommen Sie die Heizung reparieren?“ – „Ich komme die Heizung reparieren“ というやりとりが可能である，と言うインフォーマントもいる。以上のことからこの構文はかなり広くゆきわたって認知されているものと思われる。

参考文献

Abraham, Werner (2008): Absent arguments on the Absentive: an exercise in silent syntax. Grammatical category or just pragmatic inference? In: STUF 61, 358–374.

Bertinetto, Pier Marco/Ebert, Karren/ de Groot, Casper (2000): The Progressive in Europe. In: Dahl (Hg.), 517–558.

Blatz, Friedrich ([3]1896/1970) : Neuhochdeutsche Grammatik. Mit Berücksichtigung der historischen Entwicklung der deutschen Sprache. Zweiter Band: Satzlehre (Syntax) Karlsruhe.

Dahl, Östen (Hg.) (2000): Tense and Aspect in the Languages of Europe. Berlin/ New York. (= Empirical Approaches to Language Typology, Eurotyp 20.6).

Dal, Ingrid ([3]1966): Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. Tübingen. (= Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte. B. Ergaänzungsreihe 7).

Duden ([7]2006): Die Grammatik. Mannheim u. a. (= Duden 4).

Durrell, Martin ([3]1996): Hammer’s German Grammar and Usage. London/

Sydney/Auckland.
Ebert, Karen H. (2000): Progressive markers in Germanic languages. In: Dahl (Hg.), 605–653.
Erben, Johannes (1972): Deutsche Grammatik. Ein Abriß. München.
Geist, Ljudmila/ Rothstein, Björn (Hg.)(2007): Kopulaverben und Kopulasätze: Intersprachliche und intrasprachliche Aspekte. Tübingen. (=Linguistische Arbeiten 512).
— (2007): Einleitung: Kopulaverben und Kopulasätze. In: Dies. (Hg.), 1–17.
Glück, Helmut (Hg.)([3]2005): Metzler Lexikon Sprache. Stuttgart.
de Groot, Casper (2000): The absentive. In: Dahl (Hg.),693–719.
Hentschel, Elke/Vogel, Petra M.(Hg.)(2009): Deutsche Morphologie. Berlin.
Ickler, Theodor (2010): Kein „Absentiv“ im Deutschen. http://www.sprachforschung.org/print/print_ickler.php?id?=1278.
König, Ekkehard / Gast, Volker ([2]2009): Understandig English-German Contrasts. Berlin. (= Grundlagen der Anglistik und Amerikanistik 29).
Krause, Olaf (2002): Progressiv im Deutschen. Eine empirische Untersuchung im Kontrast mit Niederländisch und Englisch. Tübingen. (= Linguistische Arbeiten 462).
Rothstein, Björn (2007): Tempus. Heidelberg.
Thieroff, Rolf (2007): *sein*. Kopula, Passiv- und/oder Tempus-Auxiliar? In: Geist / Rothstein (Hg.),165–180.
Vendler, Zeno (1967): Verbs and Times. In: Ders.: Linguistics in Philosophy. Ithaca, 97–121.
Vogel, Petra M. (2007): *Anna ist essen!* Neue Überlegungen zum Absentiv in den europäischen Sprachen mit einem Exkurs zum Deutschen. In: Geist/ Rothstein(Hg.), 253–284.
— (2009): Absentiv. In: Hentschel / Vogel(Hg.), 7–15.
Wilmans, Wilhelm (1906/1967): Deutsche Grammatik. Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch. Dritte Abteilung: Flexion. 1. Hälfte: Verbum. Straßburg.